

巨人軍の創設とプロ野球報道に関する一考察

— 読売新聞と東京朝日新聞との比較 —

はじめに

日本の新聞事業者は、スポーツとの関りにおいては、世界に類がないほど密接な関係をもっている。他の国の新聞事業者がスポーツ報道のみにとどまるのは一般的であるが、日本の新聞事業者は、スポーツ報道のみならず、主催者ないし後援者という立場からスポーツ・イベントの開催を直接に仕掛けたり、プロスポーツ事業の創設と経営に乗り出したりする。これは日本の新聞事業者の最も重要な特徴の一つであると言える。

新聞部数の拡張（及びスポーツ・ニュース製造とニュース・ソースの独占という意味合い）を目的とした新聞社によるスポーツ・イベントへの参画、経営は、日本の

スポーツの発展、発達を促す動力となったといわれるものの、スポーツの健全な発展を妨害する要因ともなり、日本のスポーツの体質の形成に大きな影を落としている。この事実は、日本のスポーツの頂点にあるプロ野球において顕著である。日本のプロ野球球団のほとんどは、野球の技を人々に楽しませる興行事業体として存在することより、むしろ親会社の経営拡張の広告塔の役割を果たす性格の方が強いと言える。言い換えれば、日本のプロ野球は、アメリカ大リーグのように一つの興行業種として、決して成り立っていないのである。

日本におけるプロスポーツとジャーナリズムの関係については、わかり切ったことのようにでありながら、これまで、科学的、実証的な究明が不十分であった。そこで、

尹 良 富

筆者は、本格的なプロ野球球団として、巨人軍の創設された歴史的経緯から、さらに、戦前におけるプロ野球を含めた野球報道の実態から、読売新聞と東京朝日新聞(以下「読売」と「東京朝日」と略す)との比較を通し、プロ野球をめぐるジャーナリズムのあり方について、考察、検証したい。

一 新聞社主催の野球イベント

1、新聞社と野球狂時代

一八七三年、日本に伝わってきた野球というゲームは一九一〇年代に学生の間で人気のスポーツとなった。一高時代、早慶時代を経て、早慶明三大学学生リーグが生まれた。それと並行して、野球が中学生にまで浸透し、地方的な中学生野球試合が散発的に行われるようになっていった。更に新聞社の参画により、どちらかと言えば、自然発生した感のあるスポーツ・イベントはマスメディア・イベントへと一変した。

大阪朝日新聞は、一九一四年、豊中グラウンドで全国中等野球優勝大会(後の甲子園高校野球)を催し始めた。この大会は、中等教育拡充政策の波に乗って、支持基盤

を全国的に拡大し、学校を基礎にした野球部の結成を促した。⁽¹⁾朝日新聞は、紙面を通して、愛校心、愛郷心を高唱し、中等野球界における権威的地位を確立した。一流紙に書かれた我が故郷、母校、子弟の記事を欲しがり、人々は熱心に朝日新聞を買い求めた。特に同紙通信部が取り仕切る地方予選に参加した学校の急増につれ、朝日新聞は、部数を大きく伸ばした。夏の甲子園中等野球が行われる期間中、二割五分から三割ぐらいの増紙が達成されると報道された。⁽²⁾

また、記念広告を獲得するために様々な手段を用いた。例えば、一九二九年八月、地方代表校二十二校に(一校あたり百四十円の広告料)校章、校歌を二十二商品と組み合わせて、連合広告への掲載を強要した。それに難色を示した学校に対し、出場校の監督機関だった各府県の学務課に打電し、学務課から圧力をかけようとするような不祥事が発生した。ことが発覚すると、慌てて揉み消しに乗り出し、関係者を処分した。⁽³⁾

「中等学校野球のために、あの新聞が、商売上にどれほど利益しているかを思えば、差し引きしてたっぷりとおつりを出すのが当たり前だ。その野球への御恩を考え

たら、もっと御恩報じに乗り出してもいいという理由は充分にある」と批判された⁽⁴⁾。

その後、大阪毎日新聞(東京日々)も春の全国中等選抜野球大会、都市対抗野球大会を主催するようになった。また、日本独自の軟式野球が、少年野球の急速な普及に拍車をかけた。さらに大正末期にできた東京六大学リーグは一九二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、日本の野球界をリードし、絶大な人気を集めた⁽⁵⁾。東京大学の学生生活についての調査によれば、彼らの好むスポーツ活動は、一九二九年のテニス、散歩、野球、水泳、サッカーという順から一九三四年の野球、テニス、水泳、スキーという順へ急変した⁽⁶⁾。

野球ファンも学生中心から一般人に移りつつあった。一九三二年九月二十八日に行われた東大対早大の試合の観戦者を対象とした東京市統計課の調査では、学生の比率二四・九八%に対し、商人、店員の合計の比率は二五・三九%に達した⁽⁷⁾。以上の統計は、野球が一般化している事実を浮き彫りにしていると言えよう。

更に、一九三〇年に始まったラジオ実況放送による「聴く野球」という新しい楽しみ方の誕生により、いわ

ゆる「野球狂時代」が到来するのである⁽⁸⁾。空前の大恐慌に見舞われたにもかかわらず、一九三〇年夏のスポーツ用品が前年度より三、四割増の売れ行きを見せた。その中でも、野球用具が十割以上の売り上げとなり、品切れの状態となった⁽⁹⁾。人々は野球遊びの場所を求め、東京市内の大公園はもとより、五十二個所の小公園にまで侵入し、早朝四時半から試合を始める人さえ現れた。窓ガラスが割られたり、仕事が妨害されたり、被害苦情が公園周辺の住民から多数寄せられた。東京市公園課は、遂に公園でのボール遊び禁止を命じ、警視庁の取締を要請するまでになった⁽¹⁰⁾。この野球熱狂時代の象徴とも言えるのが読売主催の日米野球というイベントであった。

2、読売主催の第一回日米野球
一九二四年、虎ノ門事件で内務省警務部長を懲戒免職された正力松太郎⁽¹¹⁾は、後藤新平の十萬円の融資をもとに、関東大震災による経営危機に陥った読売を買収し、新聞経営に乗り出し、政界復帰を謀ろうとした⁽¹²⁾。その当時の動機について、彼は、赤裸々に語っている。

「別に新聞によって世の中を覚醒し、理想を表現したいなどという考えも持っていなかったが、これからの人

間が金の力か、論の力か、筆の力かのいずれかによらなければならぬものとは思っていた⁽¹³⁾。

つまり、社会の木鐸としての新聞という認識がジャーナリストの中にまだ一般的だった時代において、新聞に対するこの正力の考え方は異色の存在であった。これは彼が新聞の歴史性から断絶したところから出発したからである⁽¹⁴⁾。さらに、長年の警察生活は、彼に大衆心理に關する敏感な嗅覚を養わせた。彼は、大衆の利害と好みを逸早くキャッチできる能力を持っていた。これは、大衆迎合主義的な正力式ジャーナリズムの展開に如何なく発揮された。

匿名作者B・E・Rは、「読売新聞はまだ伸びるか」という論評の中で、次のように論じている。

「読売がその黄色紙的立場を發揮したのは、政治面や経済面ではなく、実に娯楽の方面であった。ラジオ版の創設、日曜夕刊の発行、碁将棋面の拡大、スポーツ面、グラフ面の創設にこれを見る。あるいは八百夕刊に先鞭をつけて特に娯楽面、便利面などに主力を注いだ点にこれを見る」、「要するに他の新聞の能く為し得なかつた程度に思いきったセンセーシヨナリズムと、合法の局限ま

で行ってエロティシズムとの交錯によって非知識階級層を即ち熊公八公連を獲得することに成功したのである⁽¹⁵⁾」。

正力は、国技館納涼博覧会や本因坊と雁金八段の対局や二回にわたる日本名宝展などの話題性と面白さをもって、大衆の好奇心をそそるイベントを、紙面を通して、あり立て、大衆の関心呼び寄せて、読売の部数増大に努めた。日米野球はまさに新聞拡販のために行ったビッグ・イベントであった。

一九二九年秋、正力は、誘致資金の高額さゆえに、毎日、報知などの大手新聞社でさえ足を踏みとどめていたペープ・ルース招聘計画を引き受けた。彼は、運動部をつくり、スポーツ版を創設し、スポーツ報道に力を入れ始めた。当時、読売の社勢は年間広告の掲載段数から言う⁽¹⁶⁾と、二十八万段で、全国主要新聞のうち、第八位にあった。一九三一年十月末、正力は、「読売新聞の宣伝」と交換に、「儲けが出れば、そっくりあなたに差し上げる」という条件で、アメリカプロ野球興行師ハンターと契約し、アメリカプロ野球を日本に呼んできた⁽¹⁷⁾。アメリカ選抜チームは、東京六大学野球チームなどと十七試合を行い、十七戦十七勝の成績を残し、日本をあとにした。

(43) 巨人軍の創設とプロ野球報道に関する一考察

表1 第一回日米野球への新聞報道状況

新聞 時期	読 売		東 朝		東 日		報 知		時 事		都 国 民			
	記事	写真	記事	写真	記事	写真	記事	写真	記事	写真	記事	写真		
10月	68	129	6	3	4	5	2	4	2	4	4	0	4	3
11月	132	106	21	8	14	8	14	11	14	6	16	6	23	4

説明：記事の単位は本、写真は顔写真を含めた枚数の合計。アメリカ選抜チームは、1931年10月30日に来日、11月7日から試合を開始した。

これがいわゆる読売主催の第一回日米野球であった。ペープ・ルースは来日しなかったものの、ゲーリッグなどのアメリカプロ野球の一流選手を擁した選抜チームによる興行は読売に大きな成果をもたらした。

これまでの日米の野球交流はアマチュアが中心であった。その当時、日本の野球試合は国内の対抗競技を目的とした時代にあった。従って、大リーガーの来日は、憧れていた野球の本場のアメリカ大リーガーたちを身近に見られる喜び、さらに、大リーガーたちに挑み、アメリカ野球を追いかけ、日本の野球の力を試そ

うとするナショナルな意識の雰囲気醸成した。人々は、この「世界最強を誇る米国メジャーリーグ十六チーム中の最優秀、最精鋭を完全に網羅した世界野球史上、まだかつて例を見ざる最強チーム」に魅了され、熱狂した。⁽¹⁸⁾ アメリカ側の代表団のリープ団長が「東京駅での歓迎ぶりにただ驚く外はありません。大西洋横断飛行に成功したニューヨーク入りをした時のリンドバーグ大佐が受けたものとも比較される」と語っている。⁽¹⁹⁾ また、農村色が強かった長野県でさえ、松本県営球場で、試合を行う際、人々は、未明から詰め掛け、露営して、同球場開場以来の記録的盛況であった。⁽²⁰⁾

しかし、当然ながら、新聞拡販のために、「日米親善」の名を借り、大学生選手を興行道具化する読売の行動に対し、一部の新聞の間に批判があがった。国民新聞は、一九三一年十月三、八、十日と、三日間にわたり、運動記者の第一人者と言われた同紙運動部顧問である太田四州のスポーツ随筆を三本掲載し、野球浄化について論じた。彼は、人気投票による全日本チームの選出ということとをとりあげて、「スポーツ選手の冒瀆も甚だしい」と反感を惹起し、野球の興行化に一段の墮落を与えた」と

厳しく批判した⁽²¹⁾。また、当時の報知新聞も、戦争兵士のための慰安金を募金する人の場合には、「街道で一日メガホンに声をからして」も、集めた金が僅か十四、五円だったことに比べて、東京六大学野球「リーグ戦当局あるいは新聞社」は、「一日に四五万円の大金を集め」られることに憤激し、「酷寒の地に苦戦する吾が勇士の労を慰問するために、献金せよ」と迫るといふ読者投書「慰問金と野球」を掲載した⁽²²⁾。

しかし、多くの新聞が、無批判のままに、日米野球について、一大キャンペーンを展開した。表1が示すように、東京朝日は、かなり積極的であった。日米野球の開催に関し、一九三一年春、外務省の要望により、東京は読売、大阪は毎日が主催と決定し、一旦成立したが、その後、毎日新聞は、読売が主導権を握ることに反発し、辞退した。事態を危うく感じた正力は、当時の阪急電鉄会長小林一三に支援を求めた。小林は大阪朝日を推薦した。大阪朝日も乗り気だったが、ハンターが自分と毎日の友情関係を配慮し、反対し、成功しなかった。結局、読売は大阪での主催権を阪神電鉄に譲った⁽²³⁾。東京朝日は、一九三一年五月二十日付で、日本郵船社員各務良幸の話を引用し、「ペープ・ルース来日」という誤報をニュー

ヨーク特電という形で報じた。同紙は、日米野球に関する記事を多く掲載しただけでなく、日本橋、銀座、新宿の三越の楼上で、速報台を設置し、日米野球の全試合の速報体制をとっていた⁽²⁴⁾。

新聞のほか、ラジオ、雑誌などのメディアも、このイベントを取り上げ、読売の知名度が一気に高められた。その後の戦争報道体制に備えるために、読売は、日米野球の人気の勢いを借り、同年十一月二十五日から夕刊を発行し、併読紙から主読紙へ転換し始めた。それに読売は「日米野球戦優先予約券」を作成し、「ファンへの勧誘に百発百中」、一時に六万の読者を増やしたとされている⁽²⁵⁾。

二 巨人軍の誕生

1、大日本東京野球倶楽部の設立

一九三二年三月、学生野球選手の学業怠慢や東京六大学野球リーグの興行化など、様々な問題を深刻に受け止めた文部省は、遂に『野球統制令』を發布した。それにより、学生選手の個人的な金銭の受授や、校長の許可な

しに社会人野球と交流することが厳禁された。⁽²⁶⁾

一九三四年初め、読売は「全国読売化運動」という名のもとで、「読売愛読会」という組織を駆使し、マルチ商法を遂行するための一環として、第二回日米野球を計画した。⁽²⁷⁾『野球統制令』の制限で、一回目のように大学生選手を動員できなくなった。そこで、正力は、同紙運動部長市岡忠男、鈴木惣太郎ら野球人のプロ球団の設立の提案を受け、六月九日に、創立委員会を開き、球団設立の具体化を進めた。正力は、紙面を尽くし、このイベントを祭りあげると同時に、販売部員に「百万増紙計画」を、⁽²⁸⁾ 広告部員に「記念広告百頁獲得」を、と檄を飛ばした。⁽²⁹⁾ ベーブ・ルースを招待した今回の日米野球は、再び日本のマス・メディアを大キャンペーン活動へ巻き込んでいった。十一月の一ヶ月間、日米野球に関して、東京朝日の報道は、記事三十二本、写真十二枚で、読売⁽³⁰⁾ (記事百三十二本、写真百六十二枚) に次ぐものであった。⁽²⁹⁾ 入場券を餌に新聞購読の勧誘を行った結果、読売が一時に六万部以上の新規読者を獲得したと言われた。⁽³⁰⁾ また、読売は増紙と増行を理由に一年で四回ほど、広告料値上げを実施した。⁽³¹⁾ 一九三四年の読売の年間広告掲載

量は一九三三年の第四位から東京日々「三八八〇〇段」に次ぐ第二位「三八七六〇段」にまで躍進した。⁽³²⁾ そして読売の知名度がさらに広げられた。一説によると、同紙は、一九三五年四月に東京三大新聞の一つとなり、市内購読部数ははじめて一位となった。⁽³³⁾

第二回アメリカ選抜チームと対戦するために組織された全日本チームは、一九三四年十二月二十六日に、大日本東京野球倶楽部という会社名で、⁽³⁴⁾ 産声をあげた。

一方、東京朝日は、既に六月二十九日に、「職業野球団誕生近し」という見出しで、同球団の創設の動きを報じ、「従来の欠陥を捨てた新組織及び新方針による職業野球団は遅くとも九月初旬までには正式発表を見られるはずである」と予告した。また、十二月二十七日付で、大日本東京野球倶楽部設立の正式発表を詳しく報道した。さらに、「野球界の一転機/多様な一年を顧る」という年末野球評論のなかで、次のように述べている。職業野球団の創設により、「学生野球を真のアマチュアリズムの上に取り戻し、その分野を鮮明にすることと学生野球には飽き足らず、更に一段と進歩せる野球技に接せんがためには、職業野球の健全なる発達は一石二鳥の効果を

収めるものとして歓迎して差し支えない」(『東京朝日』一九三四年十二月二十八日付)。

2、巨人軍のアメリカ遠征における読売と東京朝日の報道

一九三五年二月十四日、大日本東京野球団一行二十人は、横浜発の郵船秩父丸に乗り、第一回アメリカ遠征の途に立った。⁽³⁵⁾ 同球団は、この遠征の途中で人気を盛りあげるために、当時の球団の顧問を務めるフランク・オールド(元ニューヨーク・ジャイアンツ選手)の勧めにより、ニューヨーク・ジャイアンツの名前に因んで、「Tokyo-Giants」を名乗りあげた(和文に訳すと、東京巨人となり、戦前の場合には、スポーツチームを「何々軍」と呼ぶのは一般的であった。今日の巨人の登録商号も「東京読売巨人軍」という)。これがいわゆる巨人軍という名前の由来である。興行日程を打ち合わせるために、先に出発したビジネス・マネージャー鈴木惣太郎は、今回の遠征の狙いは、「日本職業野球団来る!」とセンセーションの大きな渦を捲起すことにより、「日本野球界に劃時代的進出を促し、更に米国職業野球界にも革命をもたらすこと」であったという

(『読売』一九三五年二月二日付)。しかし、同球団設立の収支予算書によると、第一回のアメリカ遠征は、パシフィック・コーストリーグの諸チームとの試合による五万ドル(当時、百円≒三十三ドル)の収入の目論見がかけられた。⁽³⁷⁾ 遠征の目的は、第一に興行収入をあげることであり、野球技術の習得はそれにつぐものであったと言えよう。だが、これらの計画は失敗であった。「失敗の原因は、何といても、我々がアメリカにおけるプロ・ベース・ボール経営の実情に通じなかったからである」と、鈴木惣太郎が回顧している。⁽³⁸⁾ また、彼は、巨人軍の人気を盛り上げるために、一九三四年十一月二十日に静岡で行われた第二回日米野球第八試合の時、ベープ・ルースに対して許したヒットは五本だけで、一対零の成績で惜敗した沢村投手とロシア人少年スタルヒン投手を人気を呼び起こす材料として、大いに宣伝した(『ベープ・ボール』一九三五年六月号を参照)。ミッシェンズ、シールズ、ハリウッドなどの数少ないコーストリーグのチームを除き、巨人軍は、ほとんどの場合には、日系人などの弱いチームと試合し、百十試合七十五勝三十四敗一分で、勝率六割八分七厘という成績を残したことは何

も不思議ではなかったと言える。

読売は、二月十四日から七月十七日までの間に、約八十本以上の「巨人軍遠征」の特電を掲載した。⁽³⁹⁾ また、「米国遠征座談会」の内容を十二回にわたり、スポーツ版のトップ記事として連載した（七月十九日から三十日まで）。同時に、巨人軍をAK（現在のNHK）の電波に乗せ、「凱旋報告」を行わせた。その後、日本国内での巨人軍の試合についても、大いに報じた。第二回アメリカ遠征を始める前に、読売は、巨人軍が「大リーグと対戦する」ということを大宣伝したが、実際には一九三六年六月八日付の読売紙上で掲載された「第二回来国遠征巨人軍勝負戦績」を見ると、大リーグとの試合は全くなかったのである。しかし、同紙は、当時、排日本場と言われたアリゾナ州フェニックスで、その代表チームを降した巨人軍を英雄として仕立てあげた（『読売』一九三六年六月九日付）。

一方、東京朝日は、巨人軍の第一回渡米遠征に関し、連合通信の配信四十七本、電通の配信一本、合計四十八本の関連記事を掲載した。二月二十七日付の記事の中で、ハリウッドとの試合はチャップリンなどのスターが見物、

声援に来る予定であると報道した。更に三月一日付の記事では、サンフランシスコに到着した巨人軍は「旅装を解く暇もなく直ちにシールズ・スタディウムに最初の練習を行った。選手一同は長航海の疲労を見せず、素晴らしい元気でファンを喜ばせた」と讚えた。

アメリカ遠征を経て、巨人軍は、日本国内の鉄道チームなどを相手に四十試合を行ったが、東京朝日の報道はわずか五本の短い記事であった。更に巨人軍の第二回渡米遠征に対し、一九三五年十二月から一九三六年五月までの間に、東京朝日は、二十八本の記事を掲載したものの、その記事の長さは第一回よりかなり短くなり、巨人軍に対する報道の熱意はスローダウンした。

三 学生野球と興行野球の論争

1、プロ野球に対する東京朝日の態度の転換と読売の反論

一九三五年十月二十二日、東京朝日は、国民新聞、新愛知新聞、阪神電鉄の三社が近く職業野球チームを設立すると報じ、「愈々職業野球時代」に入り、「今秋末の球界は一層の賑やかさを期待されるに至った」と評した。

しかし、巨人軍の第二回渡米遠征に関する報道から明らかなように、プロ野球に対する東京朝日の見方が次第に厳しくなりつつあった。そして、一九三六年三月十五日から四日間にわたり、同紙運動部の飛田穂州の「興行野球と学生野球」という評論を、スポーツ版のトップ記事として掲載した⁽⁴⁾。飛田は、名指しでないものの、巨人軍が渡米した際のオドールの伝授した興行方策を俎上にのせた。彼は、打者が打席に入る前に、審判者に正しく挨拶することや、守備につく前、攻撃に入る前に、ベンチの前方で、円陣を造って作戦を練る光景や、漢字で背番号をつけること及び塁を出たら「只我武者羅に塁から塁を暴れ回る」ことなど、オドールの「見世物式たれ」という言葉を引っ張り出して紹介した。彼は、「オドールの伝授にかかる興行政策は米国では多少の人気を獲得するであろうが、日本内地では当てはまらない」と指摘した上で、次のような論断を下した。

一、プロ野球は商売人の見世物式野球であり、「斜道的野球」であり、「興行野球の発生は日本野球界に好影響を与えない」こと。

二、正統日本野球はアマチュア野球であり、「学生野

球であらねばならない」、「殊に日本野球の精華である中等野球などを愈々愛護発達させねばならぬ」こと。

飛田の批判に対し、巨人軍専務市岡忠男は、一九三六年三月二十八、二十九日付の読売紙上で「球界の暴論を駁す」という一文により、反論を行った⁽⁴⁾。

「学生野球の弊害を芟除するためには、職業野球の台頭以外に途はなく、現在以上に進歩せる技術見んと欲せば、ここにもまた職業野球以外に望むことはできない。我々職業野球に志すものは、ここに刮目して、【日本の真の野球】を築き上げ、【野球の真髓】を伝え、以て何百万ファンの期待と満足を得たい」という理想を訴えるとともに、「大和魂を打ち込む独特の【日本式野球】」である職業野球の目指すものは「躍進帝国」の使命を担う世界野球の争覇であると自賛した。

2、論争の裏事情

見世物式野球をやったことを理由に東京朝日がプロ野球に対する考え方を転換したというのは少々ナイーブな解釈である。つまり、東京朝日がこの評論を発表した頃、正力松太郎の呼び掛けにより、新聞社系の巨人軍、大東京、名古屋、金鯨軍及び私鉄系のタイガース、セネター

ス、阪急、以上七つの球団が既にリーグの設立作業を進め、一九三六年四月に、日本職業野球連盟を設立していたのであった。巨人軍の一チームだけなら、日本初のプロ野球球団・日本運動協会（のちの宝塚運動協会）のように自己消滅の運命を辿る可能性が大きかったのであるが、一つの野球リーグとなると、簡単に潰れるはずはなく、プロ野球の新聞拡販の材料としての脅威は、目に見えて大きなものだったからである。

新聞研究所の『日本新聞年鑑昭和十年版』のなかの読売についての論述は、同紙の巨人軍創設の戦略をはっきり指摘している。「読売新聞の躍進はいやしくも新聞経営に志す者の特に研究すべき事象たるを失わぬ。五、六年前、漸く、東京七紙の仲間入りを為し得たかに見えた読売は八年（一九三三年、筆者注）の新聞部数七十二万六千部の実現に拍車をかけて、九年一月には市内四十万、地方六十万、併せて百万突破の新目標を立てた同年末の拡張戦においては、東朝、東日を向かうに回して、飽くまで百万突破の大戦争を演じつつある。これが攻め道具としての日本職業野球会社の創設、米因職業野球団の招聘、新鋭飛行機の購入、その他編集上から読者大衆の心

持ちを掴んで離さざるに努めている」という。つまり、この論争の裏側には、実に新聞社間の凄まじい販売競争が隠されていたのである。

読売は朝刊のみの併読紙であった頃、地方における販売は東京朝日系、東日系の販売店に頼っていた経緯があった。しかし、夕刊を発行し、主読紙として進めていくには自前の販売網が必要であった。読売は、東京朝日系販売店主が本社から独立経営を認められなかった旧体質の隙を突いて、その有力店主を次々に引き抜き、関東圏に強力な専売網を築きあげた。⁽⁴²⁾さらに読売は、戦前、社告により、自社主催のプロ野球試合の入場券を八回ほど「愛読者五割引」という形で、ばらまいた。⁽⁴³⁾東京朝日がこの論争を仕掛けた本当の目的は、読売の販売拡張の材料になりうる職業野球リーグの誕生を阻止し、その販売攻勢に歯止めをかけようとしたところにあった。

なお、その後の東京朝日には、プロ野球についての飛田穂州の論述は、ほとんど見られなかった。⁽⁴⁴⁾そして、プロ野球についての論評は、この論争から終戦までの約九年間に、僅か二本であった。

そのうち、一本は久保田高行が執筆した一九三六年末

の「本年の野球界回顧」という評論であった。久保田は、この評論のなかで、一方で、プロ野球の技術を讀めるが、他方で、プロ野球の経営は「肝腎の経済的に惨敗を喫し」、「甚だ悲観すべき状態に置かれている」と指摘した⁽⁴⁵⁾。ちなみに久保田はプロ野球の理解者として、頻繁にプロ野球の試合を観戦し、沢山のプロ野球試合評述を書き、東京朝日の整理部に送ったが、そのほとんどは整理部デスクのゴミ箱に捨てられたという証言があった⁽⁴⁶⁾。

また、もう一本の論文は当時弘前高校教授久野真吉の「二地方人の野球観」であった。東京朝日は、この論文を「本邦球界の組織の欠陥を指摘し、我が球界の将来進むべき道を指示」する「好論文」として掲載した。久野は「スポーツ精神はそれほど技術からかけ離れたものと考えられざる以上、職業野球は他山の石として、大いに研究する必要」と主張している⁽⁴⁷⁾。

四 戦前のプロ野球報道の特徴と読売の

読者層の特殊性

1、両紙のプロ野球報道の特徴

まず、野球報道におけるプロ野球の新聞報道について、

一九三九年の各月の一日から五日までの五日間のスポーツ版記事を材料として検討してみよう。その結果は、表2の通りである。記事の量から見ると、東京朝日の方は、自社主催の夏の甲子園中等野球大会について、読売新聞より約九倍多く、六月という早い段階に中等野球関連記事を掲載し始めた。一方、プロ野球報道においては、東京朝日と読売の両紙は五百二十六行対九千二百七十九行という雲泥の差を見せ、プロ野球のことなら、何でも報道する読売に対し、東京朝日の方は、試合結果中心の報道であった。また、東京六大学野球についての報道でも、三千四百五十六行対二千八百十八行で、読売は東京朝日をリードしている。

次に東京日日(毎日新聞)を加えて、一九三六年から一九四一年までの各年六月の一ヵ月間にこの三紙が報道したプロ野球記事について、紙面分析を試みた。その結果は表3のようになる。内容からみると、東京朝日の記事のほとんどはやはり試合の結果(時にスコアも掲載)だけという程度であった。東京日日の場合は、東京での試合をやや詳しく報道し、東京朝日より多少多く掲載している。また、年を追うごとにその報道量が徐々に増え

(51) 巨人軍の創設とプロ野球報道に関する一考察

表2 1939年野球報道状況

月	プロ野球		東京六大学野球		中等野球	
	読売	東京朝日	読売	東京朝日	読売	東京朝日
1	780	14				
2	244	11	30	81		
3	1,023	46	578	222		
4	1,384	191	170	311		
5	999	48	424	463		
6	1,420	52	1,052	444		28
7	260	6	133	20	112	705
8	977	29	94	42	107	1,209
9	196	0	787	1,045		
10	810	56	173	168		
11	747	51				
12	889	36	15	22		
合計	9,279	526	3,456	2,818	219	1,942

説明：1. 記事量の単位は行（表3、表4も同じ）。

2. 1939年の毎月1日から5日までの野球記事を分析対象とするが、1月、4月、7月には休刊日があり、●実数は4日間の記事とした。

3. なお、表のなかに表示されていない他の野球記事の量は次の通りである。東都五大＝読売593行、東朝453行；中等選抜＝読売364行、東朝239行；アメリカ大リーグ＝読売287行、東朝64行；関西六大学など＝読売170行、東朝46行。

る傾向が見られる。他方、読売は、相変わらず他紙より断然多く、そして、巨人軍関連記事となると、他の八球団を大きく引き離し、巨人軍に偏った報道姿勢が顕著に現れている（表4を参照）。

また、財団法人野球体育博物館の所蔵するプロ野球記事のスクラップの統計からみると、戦前におけるプロ野球報道は、球団を持つ新聞社である読売、国民、名古屋、新愛知のほか、大衆娯楽を中心とする都（現在の東京新聞）、夕刊大阪によって行われていた。それに次ぐのが、東京日日、大阪朝日、大阪毎日であった。一流紙といわれた東京朝日は非常に疎かなのであっ

表3 戦前プロ野球記事掲載状況

年月	試合	読 売	東京朝日	東京日日
1936.6	12	3,081	24	16
37.6	62	4,392	247	91
38.6	50	2,901	150	90
39.6	30	3,029	123	34
40.6	47	1,759	128	286
41.6	30	1,165	8	398
合 計	231	16,327	680	915

説明：試合のスコア・ブックは計算に含めず
(表4も同じ)。

た。以上が戦前のプロ野球報道の特徴である。

2、読売の読者層の特殊性

プロ野球が読売の後押しでできたゆえに、プロ野球の記事は読売のスポーツ報道の重要な位置を占め、スポーツ版において、完全にプロ野球尽くしであった。一九四二年八月の東大新聞研究室による東京府立一中生を対象とした新聞閲読調査(サンプル千八百八十四人)で、少年たちの新聞閲読志向とスポーツ記事との関連性は明らか

表4 読売の巨人軍記事掲載状況

年月	巨人軍関連	他の球団関連
1936.6	2,173	908
37.6	1,178	3,214
38.6	773	2,128
39.6	960	2,069
40.6	628	1,131
41.6	321	844
合 計	6,033	10,294

にされている。この調査によれば、「読みたいが、あまり掲載されていない記事」という質問に対し、一五% (順位一位)の生徒がスポーツ記事をあげた。「二位」科 学欄一〇%、三位「世界情勢と戦争ニュース七%」と いう。⁽⁴⁸⁾ここからスポーツ記事が少年たちにとって、いかに重要であったかがうかがえる。

同じく東大新聞研究室のもう一つの新聞購読調査は二 万一千百九十二人の壮丁を対象としたもので、戦前の数 少ない貴重な読者層研究資料である。⁽⁴⁹⁾この調査では、閲 読記事順位について、第一に読むものは社会「八千九百

表5 購読理由記事別の新聞の読者数

新聞	スポーツ記事	政治記事	社会記事	学芸記事
読売	203	18	43	136
東朝	56	86	64	31
東日	46	95	113	4
報知	20	12	15	4
時事	12	20	15	6
国民	4	1	4	2
都	4	3	4	11
中外	1	2	1	1
合計	349	237	259	195

説明：1. 調査人数 21,192 人。そのうち、各紙の購読者の数は、次の通りである。

読売=2,605 人、東朝=5,168 人、東日=6,324 人、
報知=1,625 人、時事=1,318 人、国民=282 人、
都=498 人、中外=422 人。

2. 表の中の数字は実数。
3. 東京大学文学部新聞研究室『新聞研究室第六回研究報告』(1942年10月)より作成。

五十七人、政治Ⅱ四千六百二十七人、スポーツⅡ二千九十五人、経済Ⅱ千八百八十五人であり、第二に読むものは政治Ⅱ五千四百八十七人、社会Ⅱ四千五百三十四人、スポーツⅡ二千九百八十二人、経済Ⅱ一千九百八十二人であった。つまり、スポーツ記事は読者の閲読順位において、社会、政治に次ぐ第三位にあった。この調査報告は、更に次のような知見を提示している。つまり、東京朝日は政治などの硬派記事により読者を獲得したものの、読売は、スポーツ、学芸などの軟派記事を売り物にして、東京朝日及び他の新聞にない読者層を獲得していたという事実である(表5を参照)。

おわりに

以上の内容により、巨人軍誕生の歴史的経緯及びプロ野球報道について、読売と東京朝日との比較を試みてみた結果、次の結論が得られた。ジャーナリズムは、プロ野球に対して極めて不公平な態度を示したのである。読売が全面的に

巨人軍をバック・アップしたのは、プロ野球というシンボルを通して、自社の新聞拡販のための企業戦略であった。これに対して、東京朝日は冷静さを欠如し、読売の拡張攻勢により自社の利益が損なわれると察すると、すぐさま非難に転じ、巨人軍に対する態度をプロ野球の全体にまで押し付けた。読売との対立という意味からプロ野球報道を極端に押さえた結果、ますます巨人軍の存在を他の球団から突出させるという逆効果をもたらした。読売の巨人軍戦略が日本プロ野球のアンバランスな発展の体質をつくった最も重要な原因と言えるが、東京朝日が果たした役割も決して小さくもなかったのである。ジャーナリズムが掲げる読者本位の報道姿勢は、全くないでもないが、しかし、企業のエゴイステイックな姿勢は、プロ野球をめぐるジャーナリズムのあり方の上に、著しく反映された。

(1) 高津勝『日本近代スポーツ史の底流』一九九四年、創文企画、二四〇頁。

(2) 『新聞之新聞』一九二九年八月二十二日付。

(3) 『新聞之新聞』一九二九年八月十九、二十、二十四、二十六日付、に詳しい。

(4) 玉野浮庵「職業野球団の解剖」『文芸春秋』一九三六年四月号。

(5) 高津、前掲書、二四二頁。

(6) 『日本評論』一九三九年五月号。

(7) 『報知新聞』一九三二年十月二日付。同紙は現在のスポーツ紙の報知新聞ではなく、本稿の中の「報知」も同じ。ただ、同紙は、一九四二年八月に読売に買収、合併されたのである。

(8) 高津、前掲書、二四一、二四二、二四三頁を参照。

(9) 『東京朝日』一九三〇年八月一日付。

(10) 『東京朝日』一九三〇年八月八日付。

(11) 虎ノ門事件 一九三三年二月二十七日、青年難波大助は、虎ノ門付近を通過した皇太子(後の昭和天皇)の車列に発砲した事件。正力松太郎 一八八五年生、一九六九年没。富山県出身、東大卒。警視庁警務部長在任中、虎ノ門事件で失脚。のち、読売新聞を買収した。戦後、梶岡刑務所(A級戦犯容疑)を出所後、日本テレビ社長、会長、読売社主に務め、衆議議員、国務大臣など歴任。

(12) 赤井清一「正力松太郎と読売新聞」『経済往来』一九三五年三月号。

(13) 正力松太郎「現代新聞論」『経済往来』一九三五年七月号。

(14) 有山輝雄「正力松太郎」『近代日本のジャーナリスト』(田中浩編、一九八七年、お茶の水書房)、一〇六六頁。

(15) B・E・R「読売新聞はまだ伸びるか」『日本評論』

- 一九三七年三月号。B・E・Rの実名が不明。
- (16) 新聞研究所『日本新聞年鑑昭和十年版』総覧編、三六、三七頁。
- (17) 読売東京巨人軍(以下、「巨人軍」と略す)『巨人軍五十年史』一九八五年、一〇八頁。
- (18) 『読売』一九三二年九月五日付。
- (19) 『読売』一九三二年十月三十日付。
- (20) 『信濃毎日新聞』一九三二年十一月十八日付。
- (21) 太田四州 一八七九年生、一九四〇年没。香川県出身、法大卒。読売、国民新聞の記者など歴任。
- (22) 『報知新聞』一九三二年十一月二十七日付。
- (23) 巨人軍、前掲書、一一四頁。小林一三 一八七三年生、一九五八年没。山梨県出身、慶大卒。阪急球団の創設者。戦前から戦後にかけて、活躍した日本有数の財界人でもあった。
- (24) 『東京朝日』一九三二年十一月八日付。
- (25) 新聞研究所『新聞研究所報』一九三二年九月十八日付。
- (26) 山川建『野球統制の話』一九三二年、文部省。
- (27) 『読売』一九三四年一月六日付を参照。今日の「マルチ商法」と同じ意味で、当時、「ネズミ算式商法」とよばれ、「四人の新規読者勧誘で一円、後は努力せずに百円、千円にも」、「見知らぬ何百人が貴下のために働く」という。
- (28) 『話』一九三五年一月号。
- (29) その次は都新聞(記事十八本、写真二枚)であった。筆者の調べによる。
- (30) 巨人軍、前掲書、一三五頁。
- (31) (28)に同じ。
- (32) (16)に同じ。
- (33) 『日本評論』一九三六年二月号。
- (34) 『読売』一九三四年十二月二十七日付。
- (35) 巨人軍、前掲書、一四七頁から一六二頁までを参照。
- (36) (35)に同じ。
- (37) 『新聞之新聞』一九三四年五月十二日付。
- (38) 鈴木惣太郎『日本プロ野球外史』一九七六年、ベイス・ボールマガジン社、二八二頁。
- (39) 筆者の調べより。
- (40) 飛田穂州 一八八四年生、一九六五年没。茨城県出身、早大卒。早大野球部監督を経て、東京朝日入社、いわゆる精神野球の提唱者。
- (41) 市岡忠男 一八九一年生、一九六四年没。岐阜県出身、早大卒。早大野球部監督を経て、読売入社、巨人軍の初代表、日本職業野球連盟理事長など歴任。
- (42) 一九三〇年から一九三六年までの新聞之新聞の関連記事を参照した。
- (43) 筆者の調べより。
- (44) その後、飛田は、東京朝日紙上で、数多くの「学生野球擁護」論文を発表し、一九三七年三月には東京六大学野球連盟を中核とする「日本学生野球統制団体」案を提唱し、東京六大学野球を文部省の統制から免れさせようとしたが、失敗に終わった。言い換えれば、飛田の狙いは東京六大学

野球を当時の日本の野球界におけるメジャー的地位を温存させ、プロ野球の成長をpushさえ込もうとするところにあつたと思われる。

(45) 『東京朝日』一九三六年十二月十四日付。久保田高行

一九〇三年生、一九八二年没。東京府出身、早大卒。東京

朝日記者、野球評論家。

(46) 『野球界』一九三八年二月号。

(47) 『東京朝日』一九四〇年三月二十七、二十八日付を参照。

(48) 東大文学部新聞研究室『新聞研究室第五回研究報告』一九四二年八月。

(49) 東大文学部新聞研究室『新聞研究室第六回研究報告』一九四二年十月。

(一橋大学大学院博士課程)